４月例会報告

PTAは必要ない？

――先日、杉並区立和田中学校のＰＴＡが廃止されるということが新聞報道されました。ＰＴＡを廃止して、地域住民のボランティア組織である「学校支援地域本部」に保護者部会として組み入れていくというものでした。「これは大変！」と思って、今月の例会のテーマにしました。大きく二つの問題があると思います。一つは「ＰＴＡとはそもそもいったい何なのか」ということを改めてきちんと考え直さないといけないということです。存在意義や役割の違うＰＴＡを　ボランティア組織の「学校支援地域本部」に組み入れること自体、問題だと思います。ＰＴＡの委員のなり手がないとか、仕事が大変だからもっとスリム化したいとか、そういう理由でＰＴＡをなくしていくという方向に非常に危機感を覚えました。

　もう一つは、学校支援のための地域本部の問題。文科省の今年の施策として全国の市町村の 1800 箇所に学校支援地域本部を設置しようという事業があり、50 億 4 千万円の予算を組んでいます。地域全体で学校教育を支援し、先生たちの仕事を軽減して子どもたちに向き合う時間を増やそうというもの。松戸市の今年の教育施策方針の中にもこの学校支援地域本部の調査･研究をするということが入っています。今後、松戸市にもこのような地域本部ができてくるだろうと思います。こういう取り組みについてもきちんと考えていきたいと思います。――

- 昨年度、小学校 2 年生の学年委員をしました。運営委員会に出席することで、「学校ってこんななの？」という危機感が募りました。「ＰＴＡって何だろう？」という疑問もわいてきました。宮原誠一さんの「ＰＴＡ入門」を買って読んだり、自分なりにＰＴＡについて考えた一年間でした。その一年が終わる 3 月に、この和田中のＰＴＡ廃止という新聞記事を読んで、どうとらえたらよいのだろうと思いました。ＰＴＡの運営に参加してみると、毎月の議題は決まりきっていて、誰かが何かを発言しても取り合ってもらえず、形式的なことでどんどん過ぎていってしまう。和田中のＰＴＡ廃止というのはひょっとして画期的な取り組みになるのか？　子どもたちの方を向いた活動になっていくのだろうかと思ったり、でも一方で、もともとのＰＴＡの理念から離れていってしまい、新自由主義に流されていくようなものになるのではないかという疑問を感じたりしました。
- ＰＴＡはマンネリ化していて、「こんなＰＴＡならなくした方がいい」と発言したことがある。小学校では、「～小まつり」というのがあって、私は子どもが主体になってやるべきだと思っていたんですが、ＰＴＡが主になって親がつくって子どもに売りつけるというようなお店などが多くて、子どもは単なるお客さん。こういうことを毎年繰り返して、それでいて親たちは「面倒くさい」と。そんなことしているくらいなら、有志が集って子ど

ものためにやってやりたいと思う者だけでやればいい。
今のＰＴＡの役割･機能をしっかり考え直したいと思った。

● うちの小学校は「学校地域連携委員会」というのがあって、6 年間位続いています。和田中の地域本部とちょっと似ているように思います。今はかなり活動が広がっていて、地域の人たちの顔がよく見えるようになっているのですが、でもちょっと待てよと思うのは、行事をやることが仕事だと思ってしまうんですね。なぜ行事をやるのか、何のために行事をやるのか。本当は子どもが主体になってやるのが大事だと私は思っています。実際、小学生だったらできるはずなんです。子どもが何をやろうか考えて、じっくり時間をかけて自分たちで準備して、それを支援するという形を大切にすべきだと思う。でも、地域連携委員会は、地域の大人たちが全部準備してしまう。地域ぐるみで学校を支援すると書いてあるけれど、地域の人たちのやりがい･生きがいということも考えているみたい。そうすると、地域の人たちの考え方というのは、子どもを伸ばすにはどうしたらよいかということを考えるよりも、子どもを保護する方向に向かっていってしまう。「危ないものは危ないと教えなくてはいけない」と。そうではなくて、危ないことを子どもたちが自分の体で感じながら、自分で考えていくという機会が大事だと思う。でもそれとは逆の方向に向かっている。
ボランティアはやる気があれば誰でもいいのか、それに対して本質は何かをいつも考えなければいけない人が一緒にリンクしている必要があると思う。この地域支援本部というのは、強制でない分大丈夫かなぁと思いました。

ＰＴＡは親が主権者として育つための場

● 和田中の報道を見て､「いよいよ教育行政の後援会ができるんだなぁ」とまず思いました。後援会というのは、「なぜ」とか、「どうして」とかを問うわけではなくて、学校からお願いされたことを100％支えていくということですね｡後で新聞の投書欄を見ていたら、杉並の大学院生の女性が「戦前･戦中の後援会を思い出した」と書いていました。そういった後援会的に親たちが国のことや学校のことを応援した結果、ああいう悲惨な戦争が起きて、その戦後の反省からＰＴＡが作られた。遅くまで親たちが話し合ってＰＴＡの規約を作り、その人たちがいろいろ勉強して、それが母体となって原水禁の署名運動などに取り組み、平和のことにも取り組んだ。そういう歴史を忘れたこのＰＴＡの廃止ではないかと。あるいは､「参加する人が少ないからＰＴＡを廃止する主な理由にしているが、校長や先生方が本気になってＰＴＡを活性化するような取り組みをした結果なのか」と問う人もいた。
ＰＴＡというのは、教師も親も対等･平等の関係。私が教師だったころ、校長が卒業式にどうしても日の丸･君が代をやりたいと言い、それに反対するほとんどの教師との話し合いがこう着状態になった時､校長は緊急のＰＴＡの役員会を開いて､「どうしても日の丸･君が代をやりたいので、ＰＴＡの力を借りたい」と言ったんです。その時の話し合いの決め手になったのが、ＰＴＡの規約でした。ＰＴＡ会長が「ＰＴＡの規約にこう書いてあります。･･･本会は日本国憲法･教育基本法及び児童憲章の精神を尊重し、教育を推進する民主的な団体として運営していく。ただし①児童の教育に関心の深い他の団体と協

力する②他のいかなる団体や機関の支配･干渉を受けない。③特定の政党や宗教を支持しない。④この会役員の名で選挙に立候補したり、候補者を推薦したりしない⑤学校の人事や管理に干渉しない…とあります。ＰＴＡが応援して卒業式に日の丸･君が代をやったということになったら、ＰＴＡが学校の人事や管理に干渉したことになりますが、その責任を校長先生が全部取っていただけるんですか」と言いました。校長先生は黙ってしまって、役員会はしばらく沈黙が続きました。そして「わかった。じゃあ終わりにしよう」と。

今のＰＴＡだったら、校長先生がお願いしたら、「先生お困りでしょうね。私たちが何とかしてあげます」と言ってしまうのではないでしょうか。たとえ校長であっても、ＰＴＡの一会員だから、対等･平等の関係。ＰＴＡの名において、学校の人事や管理に口出ししない。同様に校長や教頭が役職を利用してＰＴＡに対し干渉しない。そういう取り決め。ＰＴＡをなくし、地域支援本部に組み入れられてしまったら、そういう対等･平等の関係はなくなってしまう。

ＰＴＡというのは親が主権者として育つための場。ＰＴＡの活動を通して、親自身も主権者として育っていくという側面もある。

- 運営委員会に参加してみて、ものが言えない、何かものを言うとふさがれてしまう、そういう場であることを知りました。こんなＰＴＡは要らないんじゃないかと思えてしまう。何か考えて行動を起こしたい人がいても、どんどんつぶされていくような状況があると思います。
- 世の中と逆の流れに行っているような気がします。例えば、公共工事を行う時も、今は地域の人との話し合いを重視するようになってきているし、地域の人たちも参加して一緒に公園作りをするようなこともしている。利害関係のある人たちも同じ席について、話し合いによって折り合いをつけていくようなことも時間をかけて取り組んでいる。そういう流れを繰り返さないと民主主義は育たない。今の学校は「民主主義」という言葉もない。幼稚園の子どもたちだって、みんなでどこへ遊びに行きたいかを一時間も話し合えば結論が出せる。でも大人はそれをしない。少数意見は取り合わないし、人の意見を聞くでもなく、どうしたら折り合いがつくかを考えようともしない。残念な状況。

「ＰＴＡは親が主権者として育つ場」という意識がまるっきりないから、行事しかできない。

教育条件を整える取り組むこともＰＴＡの一つの仕事

- 互いの違いを認め合いながらも、何とか共通のものを見出して解決していくということがＰＴＡでは大切にされなければいけないと思う。それがないと、親たちのいろいろな思いが反映されないとＰＴＡへの失望感だけが高まっていってしまう。積極的にＰＴＡに関わろう、変えていこうと思う親ほど、今回の和田中の動きに敏感に反応してしまうのではないか。実質的にＰＴＡ本来の活動に取り組んでいるＰＴＡは少なくなっていて、多くは学校を支援する後援会のようなＰＴＡになってしまっている。それならば和田中のようにすれば、負担の多い役員も必要ないし、事務的な作業もなくなると。そういうところに流れていってしまうのではないかと非常に危惧しています。
- 松戸ではＰＴＡがなく、保護者会だけという学校が約 3 分の 1 あります。保護者会だけ

だと、なにか問題が起きた時にみんなで一緒に考えるとか、学校との話し合いを申し入れるとか、そういう場がない。やはりＰＴＡという場が必要だと感じて、ＰＴＡ作りに取り組む学校もこれまでもありました。

- ある小学校では、児童数の減少により新年度に学級減になってしまう学年がありましたが、お母さんたちが粘り強く署名活動や市教委･県教委への要請行動を行って、学級数を維持することができました。残念ながらＰＴＡとしての取り組みではなかったようですが、こういう教育条件を整える取り組むこともＰＴＡの一つの仕事です。
- ＰＴＡの会則を見ると、5 つの活動の中に「①家庭および地域社会の教育･文化的水準を高め、かつ民主的教育に対する理解を深めるための各種研修を行う。②公教育の充実」ということがあります。
- 戦後まもなく文科省（当時文部省）が出した「父母と先生の会」参考規約（1947 年 4 月）には、ＰＴＡの目的として「新しい民主的教育に対する理解を深め、これを推進する」「家庭生活および社会生活の水準を高め、民主社会における市民の権利と義務とに関する理解を促すために、父母に対して、成人教育を盛んにする」などと書かれています。あるいは方針の一つとして「国及び地方公共団体の適正な教育予算の充実を期するために努力する」とも書かれています。
- わが子の通う幼稚園には「父母と教職員の会」というＰＴＡ組織がありますが、私は今年、本部の私学公費助成担当になりました。すべての子どもたちが学ぶ機会を平等にということを保障するために、公費助成してほしいという取り組みをしています。こういう運動がＰＴＡの役割の一つでもあると思います。こうした運動は、和田中のような地域本部ができた時に、取り組めるのでしょうか。
- 学校支援地域本部ですから、物心両面から学校を支援するんです。

安心･安全という言葉はいいけれど、流れは監視体制

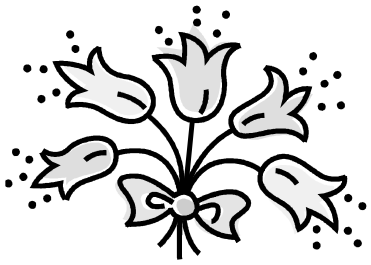
- 何のために文科省はこういう事業を始めたのだろうか。一つは教育費を削減するため。先生の仕事が大変ならば、その仕事を地域の人が支援するのではなく、十分な数の教員の配置をすればいい。でも教員を増やさないで、地域の力をあてにしている。大幅に教員を退職する人が出てくるんだから、そういう人をあてればいいという発想。退職する団塊世代のための「いきがいづくり」でもある。子どもが育つ時に、どういう学校･どういう地域が必要なのかという視点がすっぽり抜け落ちているような気もする。「ＰＴＡとは何か」ということを文科省もわかってない。
- 教育の流れだけではなく、世の中全体が「支援」という流れ。松戸市は安心・安全のまちづくりを宣言して、市役所のパトロールカーを走らせ、監視カメラを設置していますが、地域に防犯対策の支援本部のようなたまり場を各町会に作ってもらいたいと言ってきています。そういうたまり場の運営にかかる費用の 7～8 割を松戸市が補助すると。安心･安全という言葉はいいけれど、流れは監視体制。自動車を走らせて監視し、カメラを設置して監視し、子どもたちの登下校時にパトロールをして監視。不審者を監視するのではなく、子どもたちを監視している。パトロールをしている地域の人から「子どもたちの下校時間がバラバラだ」とか、

「子どもたちがきちんと挨拶をしない」とか学校に文句が出てくる。そうすると先生方が自由な発想でクラスの独自の活動をするということにブレーキがかかってくる。最初は子どもたちのためにと始めたかもしれないが、結果的にやっていることは子どもたちを監視し、学校に規制を作るように要望するような活動になってきてしまう。大人たちが目を光らせて子どもたちが寄り道もできないような状況で、子どもたちはどうやって育つのか。

- 地域連携委員会でも、「地域の人たちが一生懸命やっているのに子どもたちが来ないのはどういうことだ」と怒り出してしまって、仕方がないので子どもたちを集めるというような本末転倒なことも起こりだす。子どもたちにとっても暇な時間というのは大事だと思うけれど、そういう暇な時間をどんどん奪っていってしまうことになる。子どもたちが自分で決めて行事に参加するのではなく、「この行事に行かなくてはいけない」と親が決めてしまう感じになってしまう。
- パトロールをするより、自分たちの住む地域のどこで子どもたちが犯罪に巻き込まれているのか、危険箇所はどこかというような点検をし、子どもたちが育つためにどういう地域が必要なのかを考えるような取り組みはどんどんしてほしいと思う。
- 常に原点に、本質にたちかえる話し合いをしていかないと、すぐに形骸化していく。ＰＴＡの校外委員会でパトロールを毎年していたのですが、年度初めに何を見ていくのかを話し合いました。そして、子どもたちが学校外で安全に生活できているかどうかを見るために学区内の公園ウォッチングをして、遊具が壊れていないかどうか、死角はないかなどを見よう、通学路は子どもたちが安全に通れるような状況になっているかどうかを気をつけて見ようと確認しました。
- 地域で交通事故が何件か起きていた箇所に横断歩道を作ってほしいと要望しましたが、3年位続けて要望して、やっとできました。その後信号もつきました。
- 危ないと思ったら、そこにガードレールをつけてくださいとか、横断歩道を作ってくださいとか、信号を設置してくださいとか、そのような要望をきちんとしていくのがＰＴＡだと思う。行政に働きかけるというのが仕事。大きな力をＰＴＡは持っている。有志の親が動くよりもＰＴＡが動けば大きい。
- 特別支援スタッフの派遣も要請し続けている。要請し続けることが大切。

忙しくても、時間を割いてＰＴＡに取り組むことが、
教師にとっても大きなプラスになって返ってくる

- 新聞報道は、和田中のような学校支援地域本部を作ることが時代の流れにあっているというような論調が多い。その中で現役の保護者が「ＰＴＡをなくすのはおかしい」と発言するのはなかなか難しいかもしれない。どうやって問題の本質を皆で知り、ＰＴＡを少しでも良くすることができるか。形骸化しているＰＴＡを少しでも改善して本来のＰＴＡの活動ができるようにしていきましょうという方向にするために、どこを突破口にしたら良いのか。地域の教育懇談会がその役割を担えるのではないか。賛成する人、反対する人、よくわからない人、みんなの議論を聞きながら自分の考えをまとめていく、それが民主主義ですよね。それがＰＴＡという場では難しいのだろうか。
- 私も昔ＰＴＡで子どものことや教育のことをなかなか話し合えなくて、地域で有志が集

まる地域懇談会を開いた。若い親たちもそれぞれ悩みを抱えていて、それを話せる場を求めている。悩みを解決する具体的な方法がわからなくて、でも具体的な方法を見つけられれば大きな力を発揮する。孤立して子育てをしている親の姿も見えてくる。そういう人たちも参加できるような場が地域であるといいなと思う。

- ＰＴＡがなかなか力を発揮できないのは、大きなブレーキになっているのは教師だと思う。先生の忙しさもわかるけれど、知っている限りでは積極的にＰＴＡの活動に参加している松戸の教師はとても少ない。今、親と教師の関係がしっくりいっているかどうかというと、とてもギクシャクしている。先生たちは親のことを怖がっている。ＰＴＡ活動でいつも一緒にやっていれば、仲良くなって、わかり合えたり、ちょっとミスがあっても互いにフォローしあえたりする。でも、親と教師が離れているから、小さなことも大きな問題になってしまう。忙しくても、時間を割いてＰＴＡに取り組むことが、教師にとっても大きなプラスになって返ってくる。それがなかなか見通せないでいる。
- 「親と先生がざっくばらんな話し合いをするためには、回数を重ねないといけないですね」と意見を言ったことがあるけれど、同様に考えている先生でも「仕事が増えるから」と消極的になっていた。先生の仕事を増やすんだったら申し訳ないと親も考えてしまう。コミュニケーションがうまくいかないというもどかしさを感じました。
- 顔を合わせ、話し合いを重ねていくことで、意見は違っても納得できることもあるし、誠実な姿勢が見えてくると信頼関係もできていく。
- 文科省の「学校支援地域本部事業」の中で、地域コーディネーターの配置ということが出ていますが、どういう人がどういう役割を果たすのでしょうか。
- いったい誰がコーディネーターを決めていくのか。
- 学校長が自分のやり方を助けてくれる人を選ぶのではないか。そうだとすると批判的な意見を言う人は選ばないだろう。批判する人もいて、本当は発展する。全部賛成する人ばかりだと組織は沈滞する。
- うちの学校の地域連携委員会の活動資金源は、空き缶などの廃品回収。文科省の事業に参加して助成金も得ているはず。いったいどれだけ収入を得ているのか。支出についての報告はあるけれど、収入についての報告がない。それほど大きな支出はないからお金はたまっているのではないか。
- 松戸市の教育委員会の方針にも、学校支援地域本部の調査･研究ということが入っているので、注意深く見ていく必要がある。